

川端康成『雪国』の「底」をどう訳すか：  
隠喩の翻訳をめぐる一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今野, 喜和人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00005751">https://doi.org/10.14945/00005751</a>

# 川端康成『雪国』の「底」をどう訳すか

## —— 隠喩の翻訳をめぐる一考察 ——

今 野 喜 和 人

### はじめに

川端康成の『雪国』は翻訳研究の宝庫である。1956年、サイデンステッカーの英語訳が現れて以来、翻訳者自身のコメントを含め、数多くの評論・研究が発表されてきた<sup>1</sup>。英訳に続いた仏訳、さらにはロシア語訳や中国語・韓国語訳にまで、様々な立場から分析がなされている。例えば、訳された時代の早さ、言語の数において決してひけをとらない芥川龍之介諸作品の翻訳に比べても、研究文献の数は明らかに多い。その理由は何と言っても、『雪国』の文体の特異性に求められるだろう。日本の古典につながる伝統的文体と、新感覚派的な欧文脈の使用によって、ぎりぎりまで可能性を突き詰めた川端の感覚的な日本語は、芥川の理知的な文体に比して、他の言語に移すことが極めて困難である。いったいこの作品は「小説なのか」という問いかけさえなされる<sup>2</sup>『雪国』のポエティックな性質が翻訳を困難にし、翻訳に伴う諸問題を照らし出していると言っただろう。

本論はこれらのすぐれた研究に付け加えるものとしては、ごく限られた意図しか持たない。『雪国』中に出てくるたった一つの語を英訳、仏訳、独訳と比べてみようというものである。それは「底」という言葉で、冒頭の有名な「夜の底が白くなつた」という表現を始めとして、作品中では12箇所で見られる。それ

<sup>1</sup> とりあえず以下の三点だけを挙げておく。代表的なものとして、吉田精一「『雪国』の翻訳——川端康成の文体——」（岩田光子編『川端康成『雪国』作品論集成Ⅱ』大空社、1996年、所収、91-115頁）（初出1971年）。また「底」の英訳についての考察も含み、本論の執筆にヒントを与えたものとして、大嶋真紀「川端康成『雪国』の比喩表現——外国人留学生の視点より——」（岩田光子編『川端康成『雪国』作品論集成Ⅲ』大空社、1996年、447-454頁）（初出1993年）および同「翻訳の諸問題——比喩表現の分析と考察——」（『鹿児島大学史学科報告』42号、1995年、35-48頁）。

<sup>2</sup> 参照、田村充正『「雪国」は小説なのか——比較文学試論——』中央公論新社、2002年。

らは「桶の底」のような即物的な使い方ではなく、「夜の底」に特徴的に示されるように、多少なりともレトリカルな比喩的表現ばかりであって、二回現れる一例（「胸の底」）を除いてすべて異なった語と結びつけられている。したがって、何種類かの翻訳に現れた訳例と比較することで、それぞれの翻訳者の姿勢と、隠喩の翻訳全般に関わる何らかの考察が引き出せる可能性がある。少なくとも翻訳のヴァリエーションを示す具体的データにはなるだろう。

むろん、この語の選択は恣意的になされたものではない。川端が「底」という表現を好む作家であることは夙に指摘されており、ある意味では『雪国』の「キーワード<sup>3</sup>」とも言えるような重要な言葉である。国語学者の小池清治は『雪国』中の上記12例を引いた後に、「底」にまつわる隠喩的表現を多用した作家として夏目漱石を挙げ、さらにその源泉としてシェイクスピアの用例を挙げている<sup>4</sup>。「底」のないものに「底」を付けるという、破格の（言語学的に言えば「共起制限破り」の）表現法は近代日本語の生成過程において、英語の“the bottom of ~”から輸入された可能性があることを明らかにしたのである。本論はこの小池の研究を出発点とし、「底」の隠喩が仮に英語の世界から移された文学的な日本語表現であるとするなら、その表現を今一度英語もしくはそれに近い言語に翻訳した時に、どのような表現形態を取るかを調査しようとするところから始まった。極めて川端らしい表現の一つが外国語にどのように訳されるかという問題を通じて、川端自身の文体の特異性や、川端を捉えていた想念の本質が照らし出される契機となることも期待される。

## 1. 底—— bottom —— fond —— Grund

まず、『雪国』中の表現を必要最低限の前後関係とともに抜き出してみよう<sup>5</sup>。

1. 夜の底が白くなつた。(p. 9)
2. 鏡の底には夕景色が流れてゐて […]。(p. 13)
3. 村はしいんと底に沈んでゐるやうだつた。(p. 15)

<sup>3</sup> 大嶋眞紀「川端康成『雪国』の比喩表現」、453頁。

<sup>4</sup> 小池清治「川端康成と夏目漱石——表現の系譜・『青い海黒い海』『雪国』『伊豆の踊子』——」（川端文学研究会編『川端文学への視界』13、1998年、10–24頁）。同論文中、漱石の用例では『我が輩は猫である』から「記憶の底」、『倫敦塔』から「陰の底」など14例、シェイクスピアは『ヘンリー四世』から“the bottom of our all fortunes”（「運命の底」）、『ロメオとジュリエット』から“the bottom of my grief”（「悲しみの底」）など、7例が引かれている。

<sup>5</sup> 以下、『雪国』本文の引用は『川端康成全集第十巻』（新潮社、1980年）により、頁数を本文中に括弧内で示す。なお、旧字体は新字体に改めた。

4. 「心の底で笑つてるでせう。今笑つてなくつても、きっと後で笑ふわ。」  
(p. 34)
5. 一面の雪の凍りつく音が、地の底深く鳴っているやうな、厳しい夜景であつた。(p.38)
6. 胸の底まで冷えるやうに思はれたが、気がつけば窓を開け放したままなのであつた。(p. 52)
7. 村は寒気の底へ寝静まつてゐた。(p. 63)
8. 駒子が虚しい壁に突きあたる木霊に似た音を、島村は自分の胸の底に雪が降りつむやうに聞いた。(p. 125)
9. 雪の底で手仕事に根をつめた織子達の暮しは、その制作品の縮のやうに爽かで明るいものではなかつた。(p. 126)
10. 海や山の鳴る音を思つてみるだけで、その遠鳴が耳の底を通るやうだつた。(p. 127)
11. 駒子の聞きちがへで、かへつて女の体の底まで食ひ入つた言葉を思ふと、島村は未練に絞めつけられるやうだつたが、[…](p. 134)
12. 後姿が暗い山の底に吸はれて行くやうだつた。(p. 136)

次に、英訳(1956年、Eと略称)、仏訳(1960年、Fと略称)、独訳その1(1957年、D1と略称)、独訳その2(2004年、D2と略称)のそれぞれの訳語を表に並べて対照してみる(次頁の表を参照。出典および前後関係を含めた文章全体の引用は論文の補遺に纏めた)。

まず検討したいのは、「底」という単語を日本語—外国語辞書で引いた時、その筆頭に出てくるべき語——英語であれば“bottom”、仏語であれば“fond”、独語であれば“Grund”——がどれだけ使用されているか、という問題である。すると、極めて特徴的な事実が判明する。それはサイデンステッカーによる英訳に一切“bottom”という語が現れないということである。小池の説によれば、「底」の隠喩的表現は英文学における“the bottom of ~”を起源とする可能性があるという。ではなぜ12例もある「底」が、翻つて英語に訳された時に“bottom”にならないのだろうか。

翻訳、特に文学的なテキストの翻訳において、辞書の提示する訳語を採用しなければならない理由は語学的にも文体論的にも存在しない。語の意味する範囲の大きさは言語によって恣意的であり、他の言語に全く同一の意味範囲を持つ語が原理的に存在しないということは構造主義以降の言語学が教えるところ

	原文	英語 (E)	フランス語 (F)
1	夜の底が	under the night sky	sous la ténèbre de la nuit
2	鏡の底には	In the depth of the mirror	Sur le fond, très loin,
3	底に沈んで	sunk quietly into the earth	dans le mutisme de la terre
4	心の底で	Deep in your heart	tout au fond du cœur,
5	地の底深く	deep into the earth	dans le sol
6	胸の底まで	to the pit of his stomach	jusqu'au creux de l'estomac
7	寒気の底へ	under the cold sky	sous le ciel froid
8	胸の底に	in his chest	au fond de son cœur
9	雪の底で	under the snow	dans leur prison de neige
10	耳の底を	(なし)	au fond de son oreille
11	女の体の底まで	to deep into the woman's being	jusqu'au plus profond de son être, au plus intime de sa féminité
12	暗い山の底に	into the mountain	dans l'ombre, comme absorbée par la montagne

ではなかったか。「底」と“bottom”は決して等価ではないのである。仮にほとんど意味内容の重なる語彙が両言語間に存在したとしても、一度採用した訳語をその語が出るたびに用いなければならない理由もない。ましてや外示 denotation 以外に当該言語に特有の共示 connotation が大きな働きをする比喩表現においてはなおさらである。

にも関わらず、サイデンステッカーが「底」を訳す時に“bottom”の語を一度も使わなかったという事実、さらに“bottom”に近い語義をもつ“depth”を一度だけ用いて、類似した名詞を一度も使っていない事実は、彼の訳の特徴を端的に表現していると言って構わないだろう。第一例を用いて簡単に言えば、「夜の底」の直訳“the bottom of the night”のような表現が、英語としてこなれていないか、現代小説の訳文の中で浮き立ってしまうと判断した結果、“under the night sky”「夜の空の下で」という通常の（隠喩的ではない）表現を使用したのである<sup>6</sup>。

翻訳というものが生まれて以来、「直訳か意識か」という論争は頻繁に繰り返されてきた。有名な *Les belles infidèles* (不実な美女) の言い回しを持ち出す

<sup>6</sup> 田村充正氏がサイデンステッカー氏本人に「何故“the bottom of the night”と訳さなかったのか」という趣旨の質問をしたところ、「“night”とその後の“white”が韻を踏んでしまって、軽々しい印象を与える」から、という答えを得たという。

ドイツ語1 (D 1)	ドイツ語2 (D 2)
bis auf ihren Grund	Der Nacht Tiefe
Auf dem Grunde des Spiegels	Auf dem Grund des Spiegels
wie versunken da	im weißen Grund versinken
Im Grunde Ihres Herzens	im Grunde Ihres Herzens
tief in die Erde hinab	tief aus dem Grund der Erde
bis auf den Grund seines Herzens	bis auf den Grund seiner Brust
unter dem kalten Himmel	in den Grund der Kälte
in ihm	auf dem Grunde seiner Brust
unter dem Schnee	auf dem Grunde des Schnees
tief durch sein Gehör	tief durch seine Ohren
so tief und schmerzlich in sie	bis auf den Grund ihres Körpers
von dem dunklen Berge	von den dunklen Bergen

までもなく、原文に忠実であるべきか、訳文としての美を追究すべきかという問題は幾多の翻訳者を悩ませてきた。むろん、ここで言う「直訳」と「意訳」とはあくまで相対的な概念であり、テキストの性質（科学的・技術的な文献か文学作品か）や論争の舞台（学校教育の現場か、文芸批評か）によってどこに線を引くべきかは異なっている。本論ではもちろん文学的テキストに於ける対立を問題にしているのだが、大まかに言って、原文の（「起点言語」の）表現方法と、訳文の（「目標言語」の）自然性や文学性とのどちらかを犠牲にしなければならない選択を強いられた時、前者を優先するか、後者を優先するか、という姿勢の違いに帰結するだろう。

その上で言うなら、サイデンステッカーの『雪国』訳が「意訳」的であることは一読して明らかであり、加えてサイデンステッカー自身、「意訳」派としての論陣を張っていることはよく知られている。例えば、「文学作品を逐語的に、文字通りに訳すこと」は「無意味である」と断言して、彼はこう言う。

[...] 翻訳者が、原著の文学的価値と同等なものを翻訳の中にだしたいと思うならば、ある場合には翻訳によって失なわれたものをつけ加えなければならない。また翻訳することによって、原著の文学的価値以上の、不必要なものが表現される場合には、その部分を削除しなければならない。

またある場合には、英語小説として自然な形にするために、原著の構造に変更を加えなければならないことさえある。このようにしてでき上がった翻訳書というものは、単に英語の文章という点からだけでなく、小説の構成、文学的価値というような点からも、立派な英語の作品であって、読者に翻訳書というような印象を少しも与えないものであるといえよう<sup>7</sup>。

「直訳か意識か」は常に論争の的になっていても、欧米の規準から見れば明らかに「直訳」的な翻訳書を読むことに慣れている日本人にとって、サイデンステッカーの訳は自分たちの考える「翻訳」から逸脱したものである。学校の英語教育において何年間も逐語訳を強いられた経験のある日本人は、『雪国』の原文と英訳を比べた時に衝撃を受けずにいない。『雪国』の英訳を発表した後、賛辞の他に日本人の間から聞こえてきた様々な疑問・不満の声は、サイデンステッカーを苛立たせ、翻訳者たるものは原著に手を加えることすら辞さないという、上のような確信犯的発言を生み出したものと思われる。

実際、サイデンステッカーの自由な訳しぶりは作品のどこを取ってもすぐに感じ取れるものであるが、このように同じ「底」という一語の訳文を並べた時に、目に見える形で明らかになるのではなかろうか。と同時に、“fond”の語を4例使った仏訳、“Grund”を同じく4回用いた独訳その1、そして何よりも、表に示した中で一番新しいトビアス・チェウンによる独訳において、12例中9例も“Grund”の語が登場する事実と対比した時に、それぞれの翻訳家の姿勢の違いとともに、サイデンステッカー訳の特異性が（チェウン訳の特異性と併せて）照らし出されるのである。以下、もう少し立ち入って、訳文を検討していこう。

## 2. 生きるか死ぬか

既に述べたように『雪国』の「底」はすべて多少とも比喩的な言い回しの中で用いられている。5の「地の底」は具体的に存在しうるが、「雪の凍りつく音が、地の底深く鳴っているやうな」という二重の隠喩・直喩的表現において現れ、7の「寒気の底」は気象学的にあり得るかもしれないが、これまた「村は寒気の底へ寝静まつてゐた」という換喩・隠喩表現の中に登場する。9の「雪の底で手仕事に根をつめた織子たちの暮し」についても事情は変わらない。そ

<sup>7</sup> サイデンステッカー、那須聖『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』（培風館、1962年）、212—3頁。

れ以外は抽象的な「底」ばかりである。ただし、隠喩としての価値、詩的な味わいはそれぞれ微妙に異なっている。その中で、4の「心の底」や6、8の「胸の底」は日常的・慣用的に使われる表現であり、「心底」や「胸底」という漢語もあって、詩的な衝撃力はほとんどないだろう。10の「耳の底」には「耳底」という漢語もあるが、現代ではほとんど使われない表現であるため、むしろ隠喩としての役割を取り戻しているかも知れない。これらに比して、1の「夜の底」、2の「鏡の底」、11の「女の体の底」などは、すべて川端のオリジナルとは言えないまでも極めて新奇な表現であり<sup>8</sup>、読者の注意を惹くに十分な力を持っている。

このように、隠喩表現の詩的喚起力や新奇性を問題にする時、修辞学ではしばしば、その隠喩が「生きている」か「死んでいる」かという規定の仕方をする。どんなに目新しい（「生きた」）表現でも、それが人口に膾炙し、何度も使われるようになれば慣用句の中に分類され、さらに進めば隠喩性が全く意識されない状態にまで陥る。机の「脚」のように、語源的に見れば隠喩であったものが、全く通常の表現の中に入っている語彙も極めて多い。ここまで来れば、隠喩性は全く「死滅」する。しかしまた、たとえ使い古された比喻でも、ちょっとした文脈の違いで新鮮な修辞性を纏って復活することもある（陳腐な例だが、「地震のために机の脚が歩き出す」こともあるだろう）。したがって隠喩の生命は一つの言語の中でも流動的なのであるが、ここに翻訳の問題が絡むとさらに複雑な様相を呈する。つまり原文に用いられた喩えの語（「喩詞」と呼ばれることがある）のイメージを尊重するか、それともその隠喩の詩的生命や慣用性を移植すべきか、翻訳者は決断を強いられることがあるからである。

まず、12例の中では最も慣用的な表現である「心の底」から見てみよう。英訳は“deep in your heart”（心の（奥）深く）と比喻性がほとんど感じられず、仏訳の“tout au fond du cœur”、独訳1と2の“im Grunde Ihres Herzens”はいずれもほぼ直訳で、それぞれの言語の中でも慣用句と感じられる。英訳に「底」にあたる名詞がない他は、ここで翻訳を通じた隠喩性の変動はほとんど生じていないと言ってよかろう。また、8の「胸の底に」も、駒子の「木霊に似た音」を「雪が降りつむやうに」聞くという、二重三重の比喻表現の中に出

<sup>8</sup> 「夜の底」は芥川の『羅生門』末尾近くに、「鏡の底」も漱石の『明暗』冒頭近くに使われていることを小池が指摘しているが、後者は「八百五十倍の鏡の底」、つまり「顕微鏡」の話であって隠喩とは言い難い。「体の底」は日常的にも使えそうだが、「女の体の底」は後にみるように大分別のニュアンスが加わってくる。

てくるが、これ自体は「心の底」と言い換えてもそれほど違和感のない表現であって、英訳の“in his chest”（胸の中に）、仏訳の“au fond de son cœur”（上記「心の底」の訳から強調の副詞 tout を除いただけ）、独訳 1 の単純な“in ihm”（彼の内で）、いずれも隠喩として「生きて」はいないが、原文の詩的価値とそれほど格差はないだろう。しかし、独訳 2 が喩詞を尊重して、ほぼ直訳と言える“auf dem Grunde seiner Brust”を採用したことは議論の余地がある。原文の印象よりも隠喩性が際立ち過ぎるきらいがあるのである。

その点は、同じく「胸の底」という表現を用いながら、これとは多少意味内容の異なる 6 と対照させた時に明らかになる。ここで島村は「破廉恥な危険」の匂いを味わいながら寝ころんでいて、「胸の底まで冷えるやうに思われる」。だが純粹に精神的な「冷え」と思われたこの箇所は次の「気がつけば窓を開け放したままなのであつた」という付加によって、肉体的な「冷え」と重ね合わされていることが判明する。言い換えれば、「胸の底」という慣用的表現の中で消えていた隠喩的価値（「胸」の身体性）が復活するのである。これを訳すにあたって、英訳“to the pit of his stomach”も、おそらく英訳に倣った仏訳“jusqu’au creux de l’estomac”も、「みぞおちまで」という具体的な身体部位を用いた、慣用的ではありながら本来の意味も失っていない表現を採用している。独訳 1 の“bis auf den Grund seines Herzens”（心の底まで）は“bis auf”によって「底」は強調されるものの身体性はあまり感じられない。それに対して独訳 2 はまさしく直訳的な“bis auf dem Grunde seiner Brust”をここでも用いて、耳慣れない表現ではあっても 8 の場合と違って隠喩性の保存において長がある。

なお、原文のイメージ（喩詞）を直訳すると目標言語で違和感がある場合、別の喩詞を利用して、隠喩性だけを保存することがある。上記の「胸の底」の「みぞおち」への転換もそれに近いが、表に示した 12 例の四種類の訳の中では、9「雪の底で」を“dans leur prison de neige”（彼女らの雪の牢獄で）と訳した仏語の例が際立つ。これは「しゃれ」の翻訳などにも使われるテクニックだが、こと「底」の訳に関する限り、サイデンステッカーはこの方法を採用していない。

他にも、かつては慣用句であったが今日ではむしろ目新しく響く「耳の底」の問題など、検討すべき項目は多いが、身体性の問題に関わるので、『雪国』全編中でも衝撃度の高い表現である 11 の「女の体の底」について触れておこう。英訳は“to deep into the woman’s being”（女の存在の奥深くまで）、仏訳は

“jusqu’au plus profond de son être, au plus intime de sa féminité”（彼女の存在の最も深いところ、女らしさの内奥に）、独訳1は“so tief und schmerzlich in sie”（彼女の中に深く、痛ましく）となっている。いずれも「体」にあたる表現がなく、「深さ」はともかく「底」もない。「体」について、サイデンステッカーが“woman”という言葉を入れながら“body”という単語を用いなかったのは、この訳本全体に現れている性的連想の微温化に関係しており、また「死体」をイメージさせかねない語でもあるからだろうか。ただ、この箇所は島村が「いい女」だと言った言葉を駒子が聞きとがめた部分である。「女の体の底まで食い入った言葉」に性愛の含意、端的に言えば、「肉体」の「下方」への連想を働かさないと読者はないだろう。すなわちここには身体性の息づいた隠喩があるのであって、これら三つの訳はいずれも言語的な制約以外の配慮から、隠喩性を切り捨てていることになる。独訳2はここでも全くの直訳で、“bis auf den Grund ihres Körpers”となっていて、独語の読者は違和感を覚えるだろうが、その違和感こそがこの破格的表現の持ち味である以上、翻訳の一つのスタンスとして尊重すべきだろう。

### 3. 垂直性と水平性

2の「鏡の底」という表現は、『雪国』全編中でも最もヴィジュアルな美しさに満ちた冒頭の夜汽車のシーンに登場する。病人をかいがいしく世話する葉子の顔が汽車の窓ガラスに映り、窓外の夕景色と重なり合う。外は夕闇がおり、内は明かりがついていることから生じた光学的現象であることを説明した後、語り手は窓について「ガラス」という表現を使わずに「鏡」と呼ぶ。それ自体も隠喩的表現ではあるが、さして詩的な価値はない。その上で有名な一節は次のように始まる。「鏡の底は夕景色が流れてゐて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのやうに動くのだつた」。ここで川端が通常の「鏡の奥」ではなく、「鏡の底」という表現を用いた理由は明らかだろう。これによって、窓の外の景色は水平方向ではなく、突如垂直的下方に追いやられ、動いていく夕景色を島村は上から見下ろす位置になるのである。そのために直後の「夕景色が流れてゐて」という、本来なら全く隠喩性を感じられない表現が異化され（生かされ）、「流れ」は文字通り水の「流れ」となる。そのイメージはさらに強まっていき、汽車の内部にいる葉子の映像と、外部の実景が重ね合わされた結果、「顔の裏を流れてやまぬ夕景色」（p. 14）、さらには「夕景色の流れの中に娘が浮んでゐるよゝに思はれて来た」（同）という、ラファエル前派ジョン・エヴァレッツ

ト・ミレーの「オフィーリア」の絵を思い出させるような幻視に到達する。

このように水平方向から垂直方向への転換は節の冒頭の「底」という語が鍵を握っているのだが、翻訳と照らし合わせた時に微妙な問題が生じてくる。それは英訳の“depth”、仏訳の“fond”が、いずれも本来は垂直方向の「深さ」や「底」を語源としていても、現在では全く隠喩性を感じさせずに水平方向の「深さ」や「奥」に用いることができるからである。例えば、日本語で「トンネルの底」と言ってしまうと違和感がある（共起制限を破っている）が、英語の“the depth of the tunnel”や仏語の“le fond du tunnel”は全く普通の言い回しとなる。その結果、英訳や仏訳の読者は引用箇所には隠喩を見ずに「鏡の奥」だけをイメージし、そこを「流れる」夕景色は通常通り、「動いて行く」“moved by”し、「次々と現れて行く」“défilait”のみである。なお、仏訳が“au fond”ではなく、“sur le fond”となっていることについて、これは直後に出てくる「背景」“l'arrière-plan”と連動しており（“sur fond de ~”は「~を背景として」の意）、かつ熟語の“au fond”（「実は」）と誤解されないために“sur”を採用したのであって、垂直性を含意するものではない。

したがって、英訳の読者が夕景色に水の「流れ」のイメージを感知するには、次の節で“flow”（「流れる」）と、“float”（浮かぶ）の語が現れるまで待たなければならず、これらも通常の（生きていない）表現と受け止められる恐れもあって、「鏡の底」という表現の中にあつた急激な（九十度の）転換は感じられない（仏訳でもほぼ事情は同じである）。

ちなみに、ドイツ語の“Grund”は確かに水平方向の「奥」にも使えるが、日本語の「底」の含意に近いものがあり、二つの独語訳がいずれも採用した“auf dem Grund (e) des Spiegels”は原文の隠喩性をいくらか生かすことができている（ただし、「流れる」の部分は独訳1が“dahinziehen”（動いて行く）独訳2が“vorbeiziehen”（通り過ぎる）を用いていて、水のイメージは現れていない）。

『雪国』における川端の「底」へのこだわりは多様な意味を持っているだろうが、周りを取り囲む山と深い雪とに閉じこめられたかのようなこの土地の閉鎖性、沈鬱性を象徴する（用例1、3、7、9など）他、人間存在を吸引して止まない深淵への落下の恐れ——と同時に誘惑——にも裏打ちされているだろう。『山の音』の中にある「月の夜が深いように思はれる。深さが横向けに遠くへ感じられるのだ<sup>9</sup>」という表現も、水平と垂直をめぐるこの種のオブセッション

<sup>9</sup> 『川端康成全集第十二巻』（新潮社、1980年）、247頁。

ンと無縁ではあるまい。したがって、『雪国』では水平面上にいる安定感を一挙に壊すキーワードとして「底」が用いられているとすることができる。英訳や仏訳ではその喚起力が消えてしまうが、仏語と違って、「底」にほぼ対応する“bottom”という語彙を持つ英語の訳者がこの語を一切採用しなかったことは、作品の味わい自体に影響を及ぼす、重大な選択だったと言えよう。

このように、「底」という語に水平方向から垂直方向への転軸機能的機能を見ていると、ふと、12の「暗い山の底」にも適用していいような気がしてくる。もちろんこれは普通に考えれば、「山の下方の部分」という意味であろうし、英訳の“into the mountain”（山の中へと）など、隠喩性をほとんど消しているのも首肯できる。逐語訳の姿勢を鮮明に打ち出している独訳2でさえ“von den dunklen Bergen verschluckt werden”「暗い山に呑み込まれる」とするのみである。しかし、駒子の「吸はれていく」後姿に、垂直的落下のイメージを見ても、読み込みすぎとは言えないだろう。その印象は、節全体を引用してみても変わらない。

駒子はちよつと左手を上げてから走つた。後姿が暗い山の底に吸はれて行くやうだつた。天の河はその山波の線で切れるところに裾をひらき、また逆にそこから花やかな大きさに天へひろがっていくやうだつたから、山はなほ暗く沈んでゐた。(p. 136)

その直前に、「天の河は二人が走つてきたうしろから前へ流れおり」る(p. 135)とあるとおり、「山の底」は天の河の落ち行く先の淵なのである。私たちの平衡感覚はここに至って全くの動揺をきたし、「島村はまた天の河へ掬ひ上げられてゆくやうだつた」(p. 138)という描写などとも相俟って、天地の別も分からない眩暈さえ感じてしまう。さらに駒子の「落下」の予感、このすぐ後、作品末尾の火事の場面で、炎に包まれた繭倉の二階から落ちる葉子の姿に重ね合わせられはしないだろうか。駒子の「山の底に吸はれて行く」「後姿」と、葉子の「水平のまま」「仰向けに」(p. 139)落ちる姿は、しばしば指摘される<sup>10</sup>両者の「分身性」と「対照性」を表す象徴の一つであるように思えてならないのである。二人が合わせ鏡のようにして落ちて行く先の「底」は、だから“abyss”、“abîme”、“Abgrund”(深淵)と訳して構わないような吸引力を担って立ち現れる。しかし、キリスト教的世界観を背景にしたこれらの言葉と違い、川端にあっては「自

<sup>10</sup> 参照、川崎寿彦「あいまいさの効果——「雪国」についての一考察——」(岩田光子編『川端康成『雪国』作品論集成Ⅱ』大空社、1996年、所収、203-233頁)(初出1977年)

然の懐」にも通じ、「彼岸」ともつながる「底」であることは言うまでもない。ひいては人間の心の底に合していくものであることは、『雪国』末尾の文が明らかにするだろう。「…踏みこたえて目を上げた途端、さあと音をたてて天の河が島村のなかへ流れ落ちるやうであつた」(p. 140)。

## むすび

以上見てきたように、『雪国』を貫く「底」にまつわる連想の糸は、いずれの翻訳においても多少なりとも断ち切られ、希薄化されている。しかしその事実認識は、誤訳や不適訳の指摘と同レベルの言挙げを意味しない。そのつもりになれば、『雪国』の各種の訳には、多くの誤訳や不適訳を——あらゆる翻訳と同様——数え上げることができるだろう。そうではなく、ここで問題にしたいのは、翻訳において原文の何ものかを掬い上げようとすれば指の間からこぼれるものが常に存在し、こぼれたものを掬おうとすれば、手の平の中にあつたものはまたこぼれずにいないということなのである。と同時に、翻訳によってこぼれたものを見つめることで、原文の真の姿が顕わになることもあるだろう。

ここで第1節において問題にした「直訳か意識か」という問題を今一度持ち出してみたい。12個の「底」の訳を表にした時に照らし出されたサイデンステッカー訳の「意識性」はそれぞれの訳例の細かな検討によって、さらに際立ったと言える。ここには訳者個人の趣味と同時に、言語学的な問題、特に日本語と英語のおかれた歴史的位置の違いも確かに関与している。明治以来、膨大な外国語（主に西洋の言葉）のテキストを翻訳することで、近代化を成し遂げた日本人にとって、外国語を「正しく」翻訳することは至上命題であり、日本語としては多少不自然な表現があっても、翻訳書の特性として許容し、むしろ表現の幅を拡大するものとして積極的な意味を見出してきた。語彙だけでなく、文法、統語法、文体のレベルで、西洋語の影響下に言語の持つ可能性を拡大し、日本語そのものを近代化したと言えるのである。そのような背景を持つ日本において、サイデンステッカーほど自由な翻訳はおおむね許されて来なかった<sup>11</sup>。それに対して英語は（独語や仏語も）、歴史的に見れば外国語の影響は無視できないにせよ、近代以降の日本語のような急激な変容は見られず、通常の言語変化の規則に従って徐々に移り変わっている。そのような言語環境の中に、外国

<sup>11</sup> 現在の出版界でかつてのような直訳調の生硬な翻訳がかなり減って、日本語らしい訳文が尊重されているのは、翻訳全体の質が上がったためであると同時に、日本語がある程度安定的な段階に達したことを示しているのかも知れない。

語を直訳した耳慣れない表現を導き入れれば、読者を混乱させ、作品の物語世界に入りやすくするだけでなく、原文の文学性を保持することも困難になる。サイデンステッカーの姿勢はこうした判断に基づいたものであって、「自然な形」を追求して英語読者に川端文学を接近し易くした功績はいくら強調しても強調しすぎることはない。

それでもなおかつ、サイデンステッカーによって「殺された」隠喩の数々を思う時、『雪国』の詩的な特質に基づき、詩的自由 poetic license を精一杯発揮した翻訳<sup>12</sup>を想像してみたくなる誘惑を禁じ得ない。物語性の際立つ散文作品ならともかく、むしろ「詩」として読んだ方が良い作品だからこそ、原文の構造とイメージをできる限り生かして、隠喩の直訳を選択することもあり得るということである（その試みの一部は、チェウンの独訳が達成している）。読者がところどころ躓き、頭の中にすんなりと入ってこない、時には違和感を覚えるような表現がちりばめられた別の *Snow Country* が現れて、『雪国』の理解を新たにし、同時に英語という言語の可能性を拡大するような事態を夢見することも、許されるように思われるのである。英語詩の現状や世界の言語環境は、その期待を 1950 年代よりも拡大させているのではないだろうか。

## 補 遺

原文：『川端康成全集第十巻』新潮社、1980 年（下線は引用者）

英訳（E）：*Snow Country*, translated by Edward G. Seidensticker, Charles E. Tuttle, Tokyo, 1957.

仏訳（F）：*Pays de Neige*, traduit par Bunkichi Fujimori, Albin Michel, 1960.

独訳 1（D 1）：*Schneeland*, Übersetzt von Oscar Benl, Carl Hanser Verlag, München, 1957.

独訳 2（D 2）：*Schneeland*, Übersetzt von Tobias Cheung, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Mein, 2004.

1. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。夜の底が白くなった。(p. 9)  
1E. The Train came out of the long tunnel into the snow country. The

<sup>12</sup> これについては、「原文尊重主義」者として（その意味では「反サイデンステッカー派」として）日本詩歌の英訳を多く手がけている佐藤紘彰の次の書を参照。『訳せないもの——翻訳にからめた文化論』（サイマル出版会、1996年）。

earth lay white under the night sky. (p. 3)

1F. Un long tunnel entre les deux régions, et voici qu'on était dans le pays de neige. L'horizon avait blanchi sous la ténèbre de la nuit. (p. 15)

1D1. Als der Zug aus dem langen Grenztunnel herauskroch, lag das "Schneeland" vor ihm weit ausgebreitet. Die Nacht war weiß bis auf ihren Grund. (p. 5)

1D2. Jenseits des langen Tunnels erschien das Schneeland. Der Nacht Tiefe wurde weiß. (p.9)

2. 鏡の底には夕景色が流れてゐて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのやうに動くのだつた。(p. 13)

2E. In the depth of the mirror the evening landscape moved by, the mirror and the reflected figures like motions pictures superimposed one on the other. (p. 9)

2F. Sur le fond, très loin, défilait le paysage du soir qui servait, en quelque sorte, de tain mouvant à ce miroir; les figures humaines qu'il réfléchissait, plus claires, s'y découpaient un peu comme les images en surimpression dans un film. (p. 21)

2D1. Auf dem Grunde des Spiegels zog die abendliche Landschaft dahin. Wie in einem Film bewegten sich das Spiegelnde und der Spiegel selbst ineinander. (p. 10)

2D2. Auf dem Grund des Spiegels zog die Abendlandschaft vorbei. Die gespiegelten Gegenstände und die spiegelnde Fläche bewegten sich dabei wie aufeinanderliegende Schichten zweier Filme; (p. 14)

3. 雪の色が家々の低い屋根を一層低く見せて、村はしいんと底に沈んでゐるやうだつた。(p. 15)

3E. The white of the snow made the deep eaves look deeper still, as if everything had sunk quietly into the earth. (p.12)

3F. Le retrait profond des entrées, dans le blanc de la neige, semblait plus silencieusement profond encore. Tout avait l'air de se tapir dans le mutisme de la terre. (p. 25)

3D1. Das tiefe weiß des Schnees ließ die ohnehin niedrigen Häuser noch

kleiner erscheinen, das Dorf lag schweigend und wie versunken da.  
(pp. 13-4)

3D2. Die Farbe des Schnees schien die ohnehin niedrigen Dächer noch weiter herabzuziehen, ganz so, als würde der Ort still im weißen Grund versinken. (p. 17)

4. 「心の底で笑つてるでせう。今笑つてなくつても、きつと後で笑ふわ。」と、女はうつぶせになつてむせび泣いた。 (p. 34)

4E. “Deep in your heart you’re laughing at me. Even if you aren’t now, you will be later.” She was choked with tears. Turning away from him, she buried her face in her hands. (p. 38)

4F. -- Au fond, tout au fond du cœur, vous sous amusez de moi ; et même si ce n’est pas vrai en ce moment, ce sera vrai plus tard. ”

Ses yeux s’étaient mouillés de larmes et elle se détourna pour se cacher le visage dans l’oreiller. (p. 51)

4D1. “Im Grunde Ihres Herzens lachen Sie sicher. Und wenn Sie es vielleicht jetzt nicht tun, so lachen Sie mich ganz bestimmt später aus!” (p. 37)

4D2. “Sie lachen im Grunde Ihres Herzens, nicht wahr? Auch wenn Sie jetzt nicht lachen, so lachen Sie doch gewiß später.” (p. 39)

5. 一面の雪の凍りつく音が、地の底深く鳴っているやうな、厳しい夜景であつた。 (p.38)

5E. It was a stern night landscape. The sound of the freezing of snow over the land seemed to roar deep into the earth. (p. 44)

5F. La nuit se tenait immobile, figée, sans le moindre soupçon de brise, et le paysage se revêtait d’une austère sévérité. On avait l’impression qu’un grondement sourd, dans le sol, répondait au crissement du gel qui resserrait la neige partout, sur l’étendue. (p. 58)

5D1. Es war eine so strenge Landshaft, daß man glaubte, den Ton, mit dem der Schnee weithin gefror, tief in die Erde hinab hallen zu hören. (pp. 43-4)

5D2. Die Nachtlandschaft lag streng vor ihm, und es schien, als käme

das Geräusch des überall gefrierenden Schnees tief aus dem Grund der Erde. (p. 46)

6. この虚偽の麻痺には、破廉恥な危険が匂つてゐて、島村はじつとそれを味はひながら、按摩が帰つてからも寝転んでゐると、胸の底まで冷えるやうに思われたが、気がつけば窓を開け放したままなのであつた。(p. 52)

6E. Aware of a shameful danger lurking in his numbed sense or the false and empty, he lay concentrated on it, trying to feel it, for some time after the masseuse left. He was chilled to the pit of his stomach-but someone had left the windows wide open. (p.62)

6F. Son soupçon de mensonge, son sentiment d'un vide et de la vanité dans tout cela, oui, c'était quelque chose de si vague, de si trouble qu'il s'en méfiait comme si cela recouvrait un inavouable danger. Longtemps après que la masseuse aveugle fut repartie, Shimamura cherchait encore à le préciser, et il finit par se sentir glacé jusqu'au creux de l'estomac. Mais aussi avait-on laissé chez lui les fenêtres ouvertes en grand. (p. 76)

6D1. Er fühlte deutlich die ganze, geradezu schamlose Gefahr, die darin lag, daß er das Falsche und Leere nicht mehr klar erkennen konnte. Die Masseuse war schon längst gegangen, als er noch immer wie gelähmt darüber nachsann. Er fröstelte bis auf den Grund seines Herzens. Doch dann entdeckte er, als er sich umsah, daß das Fenster seines Zimmers weit offen stand. (p. 60)

6D2. In dieser unwirklich anmutenden Benommenheit, die ihn vergebliche Mühe und Reue nicht mehr trennen ließ, spürte er etwas Gefährliches und Schamloses. Nachdem die Masseuse den Raum bereits verlassen hatte, nahm er — während er noch still dalag, um das Gefühl inniger zu genießen — so etwas wie ein Erkalten bis auf den Grund seiner Brust wahr. Als er wieder zu sich kam, bemerkte er, daß dies an einem Fenster lag; das weit offenstand. (p.62)

7. 道は凍つてゐた。村は寒気の底へ寝静まつてゐた。(p. 63)

7E. The road was frozen. The village lay quiet under the cold sky. (p. 77)

7F. Le chemin était dur sous le gel, et le village dormait sous le ciel froid.  
(p. 93)

7D1. Die Straße war fest gefroren. Still schlafend lag das Dorf unter dem kalten Himmel. (p.75)

7D2. Der Weg war gefroren. Die Ortschaft versank still schlafend in den Grund der Kälte. (pp. 76-7)

8. 駒子が虚しい壁に突きあたる木霊に似た音を、島村は自分の胸の底に雪が降りつむやうに聞いた。(p. 125)

8E. He heard in his chest, like snow piling up, the sound of Komako, an echo beating against empty walls. (p. 155)

8F. Et voilà qu'au fond de son cœur, il l'entendait à présent, Komako, comme un bruit silencieux, comme de la neige tombant muettement sur son tapis de neige, comme un écho qui s'épuise à force d'être renvoyé entre des murs vides. (p. 170)

8D1. Als häufte sich Schnee in ihm, so hörte er wie durch ein vielfaches Echo, daß Komako sich sinnlos an eine Wand stieß. (p. 152)

8D2. Als ob sich auf dem Grunde seiner Brust, tief in ihm selbst, Schnee anhäufte, hörte Shimamura einen Ton, der wie ein Echo Komakos klang, die gegen eine hohle Wand lief. (p. 151)

9. 雪の底で手仕事に根をつめた織子達の暮らしは、その制作品の縮のように爽かで明るいものではなかつた。(p. 126)

9E. He saw that the weaver maidens, giving themselves up to their work here under the snow, had lived lives far from as bright and fresh as the Chijimi they made. (p. 157)

9F. Il voyait les jeunes filles, une génération après l'autre, travaillant au métier, tissant sans fin dans leur prison de neige ; et il constatait que la vie qu'elles avaient vécue était loin d'avoir le brillant et la clarté de la toile de Chijimi, si pure et fraîche dans sa blancheur, qu'elles avaient faite de leurs mains actives. (p. 172)

9D1. Nach den Eindrücken in diesem Städtchen zu urteilen, war das Leben der Webermädchen, die sich, wie begraben unter dem Schnee,

ganz ihrer Hände Arbeit gewidmet hatten, keineswegs so hell und heiter wie der von ihnen gefertigte Chijimi = Stoff gewesen. (pp. 153-4)

9D2. Das Leben der Weberinnen, die sich auf dem Grunde des Schnees ihrer Handarbeit widmeten, war nicht so farbig und leuchtend wie das von ihnen gefertigte *chijimi*. (p. 153)

10. 島村は一人旅の温泉で駒子と会ひつづけるうちに聴覚などが妙に鋭くなつて来てゐるのか、海や山の鳴る音を思つてみるだけで、その遠鳴が耳の底を通るやうだつた。(p. 127)

10E. Perhaps his senses were sharper, off on a trip with only the company of the woman Komako: even now he seemed to catch an echo of a distant roaring. (p. 159)

10F. Etait-ce que ses sens s'étaient affinés durant son long séjour dans la seule compagnie féminine de Komako? Il lui suffisait, à présent, de songer à ces échos, pour entendre comme la rumeur sourde d'un grondement au fond de son oreille. (p. 174)

10D1. Shimamuras Sinne waren nun, da er ganz allein auf Reisen war und sich immer nur mit Komako unterhielt, vielleicht besonders wach und scharf geworden, denn, kaum hatte er versucht, sich das Dröhnen von Meer und Berg vorzustellen, da schien es ihm, als zöge das ferne Grollen schon tief durch sein Gehör. (p. 156)

10D2. Shimamura reiste allein, und durch die ständigen Treffen mit Komako im Onsenort wurden seine Sinne schärfer, vor allem sein Gehörsinn. Sobald er versuchte, sich das Tosen des Meeres und das Dröhnen des Berges vorzustellen, schienen die Geräusche von weit her tief durch seine Ohren zu ziehen. (p. 155)

11. 駒子の聞きちがへで、かへつて女の体の底まで食ひ入つた言葉を思ふと、島村は未練に絞めつけられるやうだつたが、俄かに火事場の人声が聞えて来た。新しい火の手が火の子を嘖き上げた。(p. 134)

11E. A feeling of nagging, hopeless impotence came over Shimamura at the thought that a simple misunderstanding had worked its way to deep into the woman's being. But just then they heard shouts from the direction

of the fire, and a new burst of flame sent up its column of sparks.  
(p. 166-7)

11F. A l'idée qu'un malentendu, une simple méprise avait pu la blesser, et la faire souffrir jusqu'au plus profond de son être, au plus intime de sa féminité, Shimamura, plus intensément encore, prit un instant horreur de la séparation.

Une exclamation poussée dans la foule, là-bas, au lieu de l'incendie, leur parvint juste à ce moment-là. Un sursaut violent de la flamme suivit aussitôt, couronné d'une gerbe d'étincelles qui se jeta contre le ciel.  
(p. 181)

11D1. Shimamura fühlte ein brennendes, hilfloses Bedauern, als er überlegte, daß diese wenigen Worte von ihm sich durch ein bloßes Mißverständnis so tief und schmerzlich in sie eingefressen hatten. Doch da hörte er plötzlich von dem Brandplatz Schreie herüber gellen. Ein neuer Ausbruch von Flammen sandte eine Unzahl Funken zum Himmel auf.  
(p. 164)

11D2. Komako hatte ihn mißverstanden, doch kam in Shimamura auch so etwas wie ein reuevolles, bedrückendes Gefühl auf, wenn er an die Worte dachte, die bis auf den Grund ihres Körpers gedrungen waren. Aber plötzlich hörte er Menschenstimmen von der Brandstelle. Neue Feuerzungen wirbelten Funken auf. (p. 163)

12. 駒子はちよつと左手を上げてから走つた。後姿が暗い山の底に吸はれて行くやうだつた。(p. 136)

12E. She raised her left hand a little and ran off. Her retreating figure was drawn up into the mountain. (p. 168)

12F. D'un petit geste de la main gauche, elle avait pris congé pour se mettre à courir, et bientôt sa menue silhouette s'en alla disparaître dans l'ombre, comme absorbée par la montagne. (p. 183)

12D1. Die linke Hand leicht erhoben, lief sie fort. Shimamura erschien es, als würde sie, während er ihr nachstarrte, von dem dunklen Berge verschlungen. (p. 166)

12D2. Komako hob die linke Hand ein wenig an und rannte. Von hinten

sah ihre Figur so aus, als würde sie von den dunklen Bergen verschluckt werden. (pp. 164-5)

[付記]

川端関係の文献については田村充正氏、ドイツ語の語感については Thomas Eggenberg 氏、フランス語の語感については Jean-Claude Jugon 氏、の教えをそれぞれ受けた。いずれも静岡大学の同僚である。この場を借りてお礼を申し上げます。